

# 研究通信

第 48 号

1964 7 刊  
村落社会研究会  
事務局  
東京都港区芝三田  
2ノ2  
廣應義塾大学  
東三研究室内

## 村研拡大委員会の報告

去る六月一日予報の通り拡大委員会を慶応義塾大学第二研究室野口ルームにおいて開きました。

当日の出席者は、福武直、内山政照、竜野四郎、島崎稔、園田恭一、田野崎昭夫、柿崎京一、住谷一彦、服部治則、事務局の有賀、小池、中井、高山、米地、大淵、坂井、更に鳩書房主白石義明氏の列席がありました。

議題は本年度大会のもち方及び年報編集の件でありました。

※ 本年度大会開催の件

- 一、日時 九月二十三日・二十四日
- 二、場所 箱根強羅の文部省公務員宿舍（静雲荘）

### 三 大会のもち方

既に頂いたアンケート結果により、共通課題と自由課題の併用とし、共通課題は「むらの解体」に決定いたしました。

### 四 大会運営

- 二十三日午前九時より、自由課題二人（発表申込者）の研究発表
- 同日午後より、共通課題二人の研究発表
- 同日夜、総会並に懇親会
- 二十四日午前、共通課題二人の研究発表
- 同日午後、共同討論
- 同日夕刻解散

※ 本年度年報編集の件

年報の出版について鳩書房主から出版の条件を話して頂きましたが、書房の方からは、特別な要求はなく、本会の意向に従うが、なるべく内容の高いものにして欲しいと言うことでありました。従って、年報の内容、ページ数、部数、発行の時期等についても従来と全く違う条件の下に出版することが可能となりました。そこで当日の出席者の発言を整理しますと次の通りです。

1. 発行の条件が変更された際、年報の内容を充実すべきである。
  2. 執筆者の数を少くして、一人当り比較的多くのページを与え、充実した内容の論文をのせるべきだ。
  3. 特輯形式は止めないでもよいが、特輯の題目と別な内容の論文を含めて編集することも望ましい。
  4. 充実した内容を盛るには、編集委員会を確立して原稿を責任を以て審査し、書直しや補正を要求できる権限を与えてもよい。
  5. 前年度の大会の研究発表をのせることを原則としてもよいが、別に良い研究があれば、随時それをのせ得る余裕のある方がよい。
  6. 毎年の学界諸分野における動向をのせることは、年報として極めて大切である。
  7. 本年度の年報は既に時期も遅れているので、昨年度大会の発表と、本年度の発表から選ぶ方がよい。
- 年報については以上のような経緯があり、年報に関する今後の基本的方針を打ち出すべく大会総会において、会員諸兄におはかり致したいと存じます。

すので、今から御考慮をお願い致します。

◎ 本年度大会の発表者は次の諸氏にお願い致しますことになりました  
自由課題発表者

黒崎八州次良・原 宏  
共通課題発表者

岩本由輝・川口諦・布施鉄治  
余田博通・光吉利之

尚、テーマは追って、プログラム・レジュメと共に郵送致します。